共創　Vol. 1 pp. 81～84, March, 2023

実践研究ノート

音楽科における「体を動かす活動」を生かすための工夫について
－小学校２年生、４年生の実践事例をもとに－

国府 華子*　金原 聡子*　石黒 一江**　遠藤 泰志**

*音楽教育講座
**附属名古屋小学校

Ingenuity to make the most of Physical Activities in the Music Department
– Through Practical Cases of 2nd and 4th Grade Elemenrary School Students –

Hanako KOU*, Satoko KINBARA*, Kazue ISHIGURO** and Taishi ENDOU**

*Department of Living Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
**Nagoya Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Nagoya 461-0047, Japan

Keywords：指導法　小学校音楽科　体を動かす活動

Ⅰ　はじめに

音楽科の学習において、体を動かす活動を取り入れることの有効性は、これまでの数多くの実践が証明していることであり、活動としてはすでに浸透していると考えてよいだろう。学習指導要領にも「指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること。」(p.125)と述べられている。

国府・戸田（2019）は、身体活動を取り入れた小学校低学年の鑑賞の実践を通して身体のありかたについて再考し、学びや表現のために有効な身体だけでなく、音楽そのものと一体になる身体、「生きられた経験」としての身体のありかたにも目を向ける必要があると指摘している。今回はこの「生きられた経験」としての音楽における身体という視点をもって体を動かす活動をとらえ、授業の中での工夫について検討する

体を動かす活動は、すぐに表現や要素の理解につながるわけではない。児童の学びに生かすには、教師側の工夫が不可欠である。身体を通して理解するという道筋はいくつものステップがあると考える。それは、音楽を感じて無意識に動く、そして、意識的に自身の動きを振り返ったり、さらに動いてみたりを繰り返すことにより、音楽と一体となって動いていた自身に自覚的になる。その体験を充分にしたうえで、動きを振り返り、動きの意味を考えることにより、自分のものとしての理解や表現にたどり着く、というような流れとなる。このような過程において、指導者のどのような工夫が必要となるだろうか。

今回は、小学校の鑑賞の授業と歌唱の授業で実践を行い、教師の工夫と、それによる児童の動きの変化について見ていくことにする。鑑賞と歌唱という異なる領域の授業であるが、体を動かす活動を通して音楽をとらえ、自分のものとする過程は同じであるととらえる。

今回実践した工夫は２点である。一つ目は制限を設けずに自由に思う存分動く時間を確保することである。児童の動きは丸ごと受け止め、その動きの意味を共に探ることにする。二つ目は動きを振り返る時間をとることである。これらの工夫を通して、動いてみたことの意味の変化を見ていくことにしたい。

（金原）

Ⅱ　事例の概要

1　小学校２年生の事例（鑑賞）

⑴　ねらい

《そりすべり》の旋律、反復、変化などを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、聴き取ったこととの関わりについて考える姿を目指して授業を行った。資質を高める手立てとして、音楽の変化や反復を他者と共有する場を設けることにした。

体を動かす活動を取り入れる鑑賞は、これまでも行ってきたが、今回は新たに２つの試みを行った。これまでは、音楽の要素をあらかじめ提示した上で動いてみる活動を行っていたが、今回は、まず思う存分動くことで、音楽の要素との関わりを見つけ、さらに学びを深めていくことをねらった。２つ目は、動画を撮り、自分の動きを確認する時間を設けることで、動いてみたことで得られたことに気付くことができると考えた。

⑵　各時間の活動内容と児童の様子

第１時

旋律に注目し、旋律(音楽の感じ)が変わったことや、２つの主な旋律の変化と繰り返しが、曲の面白さを生み出していることに気付けるよう、音楽に合わせて、曲の気分に合った体の動きをして、旋律の変化を感じ取るようにした。

その際動画を撮影し、友達の動きを観ることで、自分一人では感じ取ることのできなかった曲の楽しさに気付けるよう工夫した。

まず《そりすべり》の挿絵から、楽しそうな雰囲気や雪の降っている感じ、そりが馬に曳かれて軽快に滑る様子を想像した上で、音楽に合わせて体を動かしてみた。５～６人班でお互いの動きを観ながら、何度も動いて確かめた。途中、他の児童の動きを真似たり、全然違う動きを取り入れたりしながら、児童は楽しそうに体を動かしていた。

最後に、曲に合わせて動いている様子を班ごとに動画で撮影した。一人１回ではなく色々なグループで何度も動画を撮り、様々な動きを行うことができた。児童の動きを観ていると、旋律の動きや変化に合わせて体の動かし方を変えている児童と、音色（楽器）に対して動きを変えている児童がいるように見られた。

第２時

前時に撮影した動画を観ることから授業を始めた。自分が撮った動画を確認し、曲のワクワク感を思い出しているようだった。友達が提出した動画を観て、自分と違うところ、面白かったところを見つけることで、他者の動きと、自分の動きを比較しながら、曲想の変化と、その感じ取り方の違いを楽しむことができた。気になった動きを全体で共有しつつ、友達の動きを真似て体を動かしてみたり、旋律に注目して聴き、旋律（音楽の感じ）が変わったと思うところで動きを変えながら踊ってみたりした。そうすることで、自分とは違う音楽のとらえ方を理解したり、自分の表現したことの意味付けをしたりすることができた。自分がどうしてその動きをしたのか、客観的な説明をしたりされたりしたことで、より深い学びを行うことができた。最後には座って動かずに曲全体を味わって聴き、曲の面白さを再確認する時間を設けた。ワークシートに聴き取ったことや感じ取ったことを、曲のもつ面白さについて、音楽の要素を絡めつつ記述することができた。またそれらを発表することで、曲の持つよさや面白さについて、全体で共有することができた。

１つ目の取り組みについては、制限を設けずに動くことで児童が多様な動きを行うことができ、さらにそれらを教え合うことで深い学びにつながったと考えられる。２つ目については、自分の動きを確認する時間を設けたことで、理論的に説明したり、要素に落とし込んだりすることが容易になった。また、体を動かしながら聴こうとすると、音楽に対し

ての集中力がどうしても散漫になってしまう点を、動かずに動きを観ながら聴くという活動でカバーすることができていたと思う。

（遠藤）

2　小学校４年生の事例（歌唱）

⑴　ねらい

《ゆかいに歩けば》は、前半部分と後半部分で曲想が変化する。リズミカルで歯切れのよい前半部分と、伸びやかな後半部分それぞれの特徴に気付き、それを生かした表現ができるようになってほしいと考える。

４年生の児童は、普段から自然と音楽に合わせて体を動かしながら演奏する様子が見られる。そこで、児童に対して「どうしてそのように動きたくなるのだろう」と疑問を投げかけることで、体の動きが速さ、強弱、アーティキュレーションといった音楽の要素と結びついていることに気付かせたい。そして、その動きとして感じ取ったことが表現につながるようにしたいと考えた。

⑵　各時間の活動内容と児童の様子

第１時　曲想の変化をとらえ、それぞれの特徴について考える

前奏を聴いただけで児童は腕を振って動いている様子が見られた。音取りをした後、「音楽に合わせて歩きながら歌ってみよう」と声を掛けたところ、前半（ア）のリズミカルな雰囲気に合わせて元気に歩きながら歌う様子が見られた。しかし後半（イ）の曲想が変わる部分でも同じように動いていたため、「今歩いていて、歩きにくいと思ったところない？」と尋ねたところ、もう一度聴きたいと声が上がったため、再度音楽に合わせて歩くことにした。すると、イに入ったところで、ゆっくり動くなどの変化が見られた。「バルデリーのところが落ち着いた感じに聴こえたから歩くのをやめた」「バルデリーに入ったら歩きにくくなって、おっととってなった」という意見があり、曲想の違いに気付いている様子であった。

アとイの曲想のイメージをより明確にするために、グループで意見交換すると、アでは「スキップしているみたい」「楽しくはずんだ感じがする」、イでは「止まって自然を楽しんでいる感じ」「山の上にいる感じ」といった意見が出た。また、「なぜそのように感じるのか、楽譜の中に秘密があるよ」と問いかけたところ、アは「休符が多い」「スタッカートがたくさんついている」、イは「スラーがたくさんついている」「のばしている音が多い」という意見が出ており、曲想と音楽の要素と結びつけて考えることができていた。

第２・３時　曲に合った歌い方を工夫する

前時に学習したことをもとに、グループでアとイの表現を工夫する活動を行った。まず、「こんなふうに歌いたい」という思いを明確にするための話し合いを行った。アでは、「山に登るようにうきうきはねて歌いたい」「楽しく元気よく歌いたい」、イでは、「やまびこみたいにのばしたい」「おだやかに歌いたい」といった意見が出ていた。

次に、その思いを歌にするために気を付けたいことを歌いながら考えた。ポイントとして、強弱、歌詞、楽譜についている記号（アーティキュレーション）、ブレス、体の動きを工夫することを伝えた。アでは、「スタッカートに気を付ける」「短く切って歌う」、イでは、「しっかり息を吸ってのばす」「高い音を出す時には手をあげる」などの工夫が見られた。この時、「スキップをしながら歌う」「きらきらという歌詞のところで手をきらきら振る」など、歌詞や曲のイメージから考えた振り付けのような工夫も出ていた。実際の練習を見ていると、体を動かすことで曲想の変化を明確に表現し、アとイの歌い方の違いを表そうとしているようであった。

第４・５時　自分たちの歌声に着目して歌う

前時の児童の考えた表現を認めたうえで、より深く歌声に着目させるために、「振り付けのように体を動かすことはしない」「歌の

みで《ゆかいに歩けば》を表現しよう」と声を掛けた。児童は、「えー！」「できるかなぁ」という反応であったが、動く代わりに、どんなことができるのか話し合っていた。

「ア はスタッカートを意識したいね」「じゃあ、おなかを使おう」「イ ののばすところを大きな声で歌いたいな」「ブレスをしっかりしよう」「音が高くなるところは、だんだん前のめりになるといいね」といった話し合いが見られた。考えた表現を練習する姿も、前時の活動の時は振り付けが主体となって曲想の変化を表していたが、曲想の変化を自分たちの歌声で表現しようと強弱や息遣い、体の使い方に気を付けている様子が見られた。実際の歌声も、ア と イ の曲想の違いをよく捉えた歌声に代わっていた。

曲想に合わせて動く活動を十分に体感したからこそ、その違いを理解し、「歌声だけで表現する」という活動で、歌唱表現の工夫にすぐにつなげて考えることができたのだと思う。（石黒）

Ⅲ　まとめ

音楽科の活動において、「体を動かす＝学びが深まる」というわけではないところに体を動かす活動を取り入れる難しさがある。それはそもそも、音楽と体が一体である、体を通して音楽をとらえている、ということともリンクする。だからこそ有効であり、だからこそ難しいのである。児童が音楽を感じて動いている姿はごく自然なものであるがゆえに、それを学習に生かす、表現につなげるためには、工夫が必要となる。

今回は動いてみたことを学びに生かす、表現に生かすにはどのような工夫が必要となるか、という視点での実践を行った。そのポイントは２点。まずは思う存分動いてみること、それを振り返る時間、タイミングをとること、である。

２年生の実践では、動きを客観的にとらえるために動画で自分の動きを見直す活動を取り入れた。４年生の実践では、動いてみたことで得られた気付きをもとに表現の工夫を行い、動きながら表現するという過程を経た上で、動かないで表現することにたどりついた。

学年も領域も異なる活動であるが、時間の経過とともに、児童の体の動きの意味合いが変化していることがわかる。歌唱活動の方でたどってみると、何気なく動いていた最初の動きから、教師の声かけによって、音楽をよく聴いて考えながら動く方向に変化する。考えて動くようになったことで、動くことそのものを表現の工夫に加えることになる。この動きの工夫には、振り付けのような動きとともに、表現する声のための動きや曲想を表すような動きも含まれており、高くのびやかな声を出す際に、曲想の変化を表現する際に、役立っているように見えた。体を動かすことの意味を自分たちで探し出し、表現に生かしていると言えよう。このような流れを経たからこそ、動いてみたことで得られた様々な気付きが内在化され、声での表現につながったのだと考えられる。動いてみたことを学びや表現に生かすためには、充分に動いてみること、動きを音楽と結び付けて考えること、自身の動きを振り返り、その意味を感じてみること、動きを止めることで、動いていたときのエネルギーを感じることが必要であると言える。そのためには、教師が児童の動きを丸ごととらえ、共にその意味を探る視点を持つことが求められる。（国府）

引用文献

国府華子・戸田彩華（2019）「音楽授業における身体の再考－身体活動を取り入れた小学校低学年の鑑賞の実践を通して－」『愛知教育大学研究報告』第69輯、pp.11－16。

小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説音楽編。